
最強の脇役の人生

マコT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の脇役の人生

【Nコード】

N1663Y

【作者名】

マコト

【あらすじ】

車に轢かれ、神様によって異世界　もう一つの日本に転生した少年紳士、西院司月。彼の転生した世界は、魔法と危険の蔓延る、幻想した世界だった。彼はこの世界で、学園に通い、大事な友人達と出会う。彼は友人を守るため、密やかに戦い続ける。

処女作で、最強物です。この小説は、あまり考えずに気楽に読む事をお勧めします。タイトル変えました。

第1話（前書き）

はじめましてマコトといいます。これは最強物で、作者の処女作です。気楽にかいていきますので、皆さんも気楽に読んでみてくださいと幸いです。

第1話

人は死ぬ。

それはもう、多種多様な方法で。なんでこんな事冷静に考えているかというと。

『おい、子供が轢かれたぞ！』

『おええ……………』

俺の視界は横たわり、一切の身動きを許さない。俺を見る恐怖の視線、必死の形相で俺を揺する男性、凹んだトラック。察するに、俺は車に轢かれたらしい。何故轢かれたかは、わからない。

『大丈夫！？』

おっ……………これは……………！

ぼうつとしている意識をフル活動させ、視界から入る情報を脳内メモリーに保存出来るよう万全にする。もうちよい、もうちよい左に来て、お姉さん……………！

あ、待って、右に移動すんな……………お、おっさんナイス！おっさんのおかげでお姉さんが左に移動した。

しゃがむスカート姿のお姉さん。横たわる俺。動かない体。そこから至るところ結論は……………！

そう、男子が求めた究極の黄金理想郷トライアングルが見えた。まさか……お姉さん、見た目に反して、かなり卑猥で妖艶なトライアングル……良い仕事してますね………最早悔いはない、がふつ。

『おい少年！目を開けるお！』

『なんで幸せそうな表情なの！？』

「……はっ！？黒！？」

「……いっそ清々しい程だね」

「おっ」

目の前にあったのは黒き理想郷ではなく、金髪碧眼のゴスロリ少女だった。赤い花弁の髪飾りがアクセントになっていて、可愛い。

「私は神様さ」

「ほー、神様かー、偉いでちゅねー。さ、それよりそのひらひらスカートから覗く魅力的で雪のような穢れなく美しい御足を見せなさい、いや、魅せなさい」

「……現実逃避をしても何も起こらんぞ」

ですよねー、まあ嘘ではないんだけども。

「でもカミサマ？いきなり目の前に現れたゴスロリ少女に私は神だ、とかドヤ顔で言われて、信じられます？俺視点で考えてください」

「……さて、君を呼んだ理由だが……」

「同意とみて、宜しいですね!？」

「うるさいッ！私にだって間違いはありゆ……」

お、噛んだぞ、あのカミサマ噛んだ。羞恥に頬を染めてわなわな震えながらスカートを握り美少女カミサマまじ可愛い。うう……とか言いながら睨めつけてくるけど全然怖くない、寧ろ可愛い。抱き締めたいなあ！カミサマ！

「大丈夫ですよ神様。信じます、信じますから泣かないで」

「……………誠か？」

かわええええ！なにあれ、涙目＋上目使いに羞恥！？あれですか、新型兵器ですか。新型兵器KAMISAMAか、これは全世界が萌えるぞ。俺の可能性の獣もデストロイモードに移行しそうです。

「誠です、誠も誠、チヨー誠です」

「……………うむ、ならば、良い」

そんな涙目状態で胸を張る神様。でも威厳が感じられない、微塵も。

「で、だ。西院さいいんしじき司月君。君をここに呼んだ理由がある。君は先程死んだ。しかし君には力があるんだ、それは何かわかるかな？」

「……………魔力」

「性力だ」

あるえ？

「君には並々ならぬ性力がある……………まあ所謂エロスだ。エロスを探求しようとする力が尋常じゃない。性力に関しては性を司る神よりも強い」

「……………ほ、褒め言葉？」

「……………私には判断しかねる」

はいはぐらかされました。まあそうでしょうよ、魔力とかそんなフ

アンタジーな物が強いとかならまだしも、性力で。まあ確かにエロスに対する探求心が尋常でないことは否定出来ない。

「で、その性力の異常な強さを、魔力に変えてみないか？」

「……変えられるの？」

「うむ、1エロス≡100マギアだ……あ、今1エロス≡102マギアに変わった」

「株価かつ！」

というか単位が意味わかんねえよ、なんだ1エロスって。

「はっはっは、冗談だよ冗談。ゴッドジョークというやつだ」

わかるかポケエ。と、高笑いする美少女神様に心中で文句をたれる。

「……まあ、変換出来るのは嘘じゃない。いや、変換というよりは反映、か。エロスはそのままだが、そのエロスに比例した魔力が手に入る」

「……一体どれくらい？」

「うむ、常人が発動したら一瞬で昏倒する上級魔法を一日千京回使っても支障がない程だ」

どんだけだよ俺のエロス。

「君には転生する権利がある。魔法のある世界にな」

「……と、言われてもね」

「信じがたいのも無理はない。今まで全く関係のない世界で生きてきたのだからな。ま、夢だと思って気楽に考えるといい」

「……なあ神様、一つ質問がある」

「なんだ？」

俺は真剣な瞳で彼女を見る。喉が乾くのがわかる。これから暴かれる真実、それが彼女の口から果たして告げられるのか、そして俺の考えは確かに存在するのか。緊張する。額に汗が滲むのがわかる。神様も、俺の視線を感じてか、真面目な表情だ。俺は自身の内に秘める躊躇いを、勇気を振り絞って捨て払い、一步、未来へと進む。

「向こうの世界に、女性用の下着メーカーはあるのか？」

結果、神様がずっとこけました。えー、大事な事じゃないっすか。俺にとっちゃその有無によって行くか行かないか決めるくらい大事なんですよ。

「コホン　話を続けよう。君は転生したい？」

「拒否したらどうなるの？」

「ただ単に無の時をさまよい、次の転生のために魂を浄化されるだけさ」

「じゃあ転生を選んだら？」

「記憶をそのままに、最強の力を持って転生、かな。君の世界でいう、所謂強くてニューゲームだ」

なにそれ美味しい。

「色々な神様が君に興味を持っているから、皆君に少しずつ力を貸してくれるよ」

「……なんで俺に興味があるの？ただの紳士だよ？」

「エロ紳士だからじゃないか？」

また笑われる。色々な神様が興味を、ねえ……俺はただ女の子が好きで好きな一般的な紳士だというのに……。

「で、転生するのかい？」

「そつするよ」

「わかった、では、よき第二の人生を送りたまえ」

神様が俺に手を向けると、意識が一気に微睡んだ。混濁する意識の中、思い出すのは……真っ黒な……三角形でした。

どうも、皆の愛する変態紳士、司月です。転生しました。今俺は、綺麗な女性に抱かれています。いや、いやらしい意味ではなく、今は赤ちゃんなのであります。どうやら母親らしい。俺の視界はまだまだはつきりとしたものではないが、顔はすごい美人。夢げで、ガラスのような美しさがある。

合法的にあの美女の豊満な双子山の天然水を啜れるのは嬉しいのだ

が……母親である、俺を産んだ、本物の親である。気恥ずかしいと
いうか、拒絶反応がある。

俺の名前は、司月というらしい。何故かそのままだが……これは神
様の力なのかな？まあ元の名前なのは有り難い、呼ばれ慣れてるっ
て良いね。

しかし……赤ちゃんだからなのか、眠いし腹は減るし……こりゃ数
年はまともにはいかないな。

第1話（後書き）

「そついや下着メーカーは？」

「あるぞ」

「よっしやあああああ！！」

第2話

五年経ちました、どうも甲殻寄生変態獣司月です。成長して、今や色んな知識も得た。勉強は苦手なんだけど、流石にこっちの世界で生きるためには必要不可欠な事だった。

まず、俺の名前は西院司月さいいんしづき。何故か苗字まで一緒という、意味のわからない運命を辿ったようだ。

この世界はどうやら俺が生きていた世界の文明に魔法を足した世界らしい。通信機器であるケータイもあるし、地球だし、日本だし。神様が言うなはこの世界は俺が生きていた世界とは別次元にあるが同じ場所にある世界らしい、わけわからん。

まあ、魔法がある地球って考えれば良い。ただ、生きてる人物は大体違うけど。俺としてはあまり生き方変えなくて良いっていうのが凄く有り難い。

『ほう、なんだこれは』

「あ、それはポテチだよ」

『うむ、中々美味だな』

俺の横に居る黒い猫が、袋から器用にポテチを取り出して咀嚼し、嬉しそうに目を細めた。この黒猫、俺んちのペット兼、死神代k

失礼。ペット兼、神様です。ええ、神様です、あの金髪ゴスロリの。人間の生活に興味があったらしく、神様連合会に、転生させた人間の監視、という名目で俺と一緒にこっちに来た。

今の所、神様で力を貸してくれてるのを羅列してみようと思う、どんな力を貸してくれるかも。

アナト……この金髪ゴスロリ美少女。戦闘に関する力をくれる。

ガイア……地属性の力を貸してくれる。アナト曰わく『いつも微笑む皆のママン』

トール……雷属性の力とそれに関する武器を貸してくれる。アナト曰わく『エロ親父』

ロキ……幻惑の力を貸してくれ、フェンリルの卵をくれた。楽しい事が好きで、俺に最初に転生させようと画策してた神様。アナト曰わく『オカマナベ』

ヴェルダンデイ……多少の創造の力を貸してくれる。アナト曰わく『運命なんてなんぼのもんじゃと叫ぶ女』

ヴァーユ……風の力を貸してくれる。アナト曰わく『1クラスに良くいる真面目な委員長タイプ』

ルサルカ……水の力を貸してくれる。アナト曰わく『胸に脂肪を蓄えた忌まわしき敵』。凄い私怨が混ざつとる。

スプンタ・マンユ……光属性の力を貸してくれる。アナト曰わく『優等生……それ以外ない』

アンラ・マンユ……闇属性の力を貸してくれる。アナト曰わく『スプンタ・マンユを勝手にライバル視してるなにか』……なにかって

なんだよ、扱い酷くね？

今の所俺に力を貸してくれるのはこの9柱。ただ、今後の俺の活躍によつては力を貸してくれる神様が増えるようだ。と言っても今のままでも十分過ぎると思うんだがな。というかアナトさんや、あなたの『曰わく』のおかげで神様に対する印象が大分変わりましたよ、無論悪い方向で。

魔法に関してもなんかアナトが知識くれて、特になにもせずとも殆どの魔法が使えるようになった。

因みに俺のエロスを魔力に換算したら無量大数に一番近い不可思議という単位に相当する。上級魔法を一日に千京回使わないと消費し切れず、しかも数時間休めば百京回分回復するとか。もうね、バカか。こんな数字言われても実感が一切湧かない。つか1日千京回とか無理だろ……。この果てしない程のエロス、アルティメットエロス、エターナルエロス。ハンパない。

『そつえば、彼の者は実に珍しい存在だな』

「彼の者？」

『司月の友人、みさきくおん王崎久遠だ』

ああ、あいつか。そう思いながら、俺は思考した。

王崎久遠……俺の幼なじみ。女……じゃない、歴とした男だ。しかも五歳ながらかなりの美形。中性的な顔立ちで、明るい性格。光属性と他の基本属性（炎・水・風・土）に対して才能を持っている。

「珍しい、のか？」

『うむ。精霊に愛されし者、だ。この世界では高名な壬埼家の息子。しかし秘めたる才能は親をも超える』

「へえ、そんなに凄いのか」

『何を言うか。司月、君程珍しい人は居ないぞ。なんせ神に愛されし者だからな』

愛されているというより玩具にされてるように感じるのは気のせいだろうか……ああ、なんか身震いした。なんか神様からの弄ぶような視線を感じる……ってのは自意識過剰か。

『君と壬埼は似ている』

「似てなくね？」

『うむ、顔は全く似てないな。まるで天と地、いや天と地獄だ』

酷い……いや、俺が天っていう場合も　　ないな、有り得ない、絶対がない。なんせ向こうでは不細工で、アナトに聞いた所能力以外向こうとは変わらない、と言われたからだ。両親には悪いが不細工になる自信がある。ああ、ヤバい。泣きたくなってきたよ……。

『しかし私は司月の方が好きだぞ』

「……………」

サワッ

『ツツツ!??ど、どどどこを触っておるー!??』

アナト（黒猫）の尻尾を掴み、にぎにぎしてみるとまるでどこのサイヤ人の如く毛を逆立てるアナト。どうやら触覚も猫と同じらしい。

「いやあ、黒猫の可愛い尻尾のさわり心地」

『天誅!』

「ぎゃああああああ!」

顔を爪で引っかかれる。痛い……良いじゃないか尻尾ぐらい!減るもんじゃないだろう!……バチは当たったけどさ。しかし、神様にこんな事したの、俺が初めてじゃね?

『全く……猫の尻尾はでりけえとなんだぞ。触る場合は許可を取れ許可を』

許可を取れば良いんだ……。と尻尾をフリフリしながらツーンとそっぽを向くアナトに呆れながらも自然と笑みが浮かんだ。

因みに。アナトの話し方は俺の脳内に直接語りかける感じで、他の誰にも聞こえる事はない。俺も脳内会話が出るんだけど、こういう二人きり（一人と一柱?それとも一匹?）の時は面倒なので口で会話をしている。

『司月ー、ご飯よー。アナトちゃんもよびなさい』

母さんからお呼びがかかった。飯か……そういやもう夕方だったな。俺は五歳ながら非常に成長が著しいと思われているらしく、もう一人部屋も貰っている。もう一部屋空いているのだが、そこは弟か妹の部屋になりそうだ。俺は一人っ子だったからなあ、弟でも妹でも良い。

あ、でも妹のが良いな、いや妹一択だ。幼児の頃は『にいたまー』とか言いつつ向日葵でさえ顔を背ける程眩しい笑顔を俺に、俺だけに振りまき。

少し成長したら『お兄ちゃん』とか言いながらガラスですら映せなくなるほど可憐な表情で俺に抱き付きながらも一緒に風呂に入った。

また成長したら『お、お兄ちゃん……』とか炎ですら色褪せて見える程頬を羞恥で真っ赤にしながらも愛を示さずには耐えられないという苦悩の狭間で悶絶する様子に萌え。

中学生くらいになったら『なんですか、兄さん』とかクール系になって俺の飯とか部屋掃除とか完璧に出来る子になるんだけど俺のベッドに隠したエロ本を見つけて羞恥心を隠しきれず恥ずかしがりながら俺を問い詰め

「早く来なさい」

「痛っ!？」

頭に鈍い衝撃が走った。さすりながら顔をあげ、俺は一瞬にして汗が噴き出る感覚に陥った。ヤバい、阿修羅がいる　ああ、俺の母さんの西院胡仲さいいんこなかだった。この人は普段は滅茶苦茶優しくして美人な

のだが、食事の事とかになると怒る、怖い。

アナトに『あれは ヤバい』とまでいわしめた人物であるからして、相当なのだろう。

アナトは俺の使い魔、という事になっている。使い魔というのは魔導師 魔法を操れる者を魔導師と呼ぶ の眷属、使役しているモノの総称。契約を結べば戦闘だと有利だし、単に相性が良かったからっていう場合もある。

この事についてアナトは『神が人の下に立つ、か……面白いではないか』と言っていたので、あまり気にしなくても良いみたいだ。

俺は襟首を掴まれ、ずるずると引き摺られていく。シクシクと涙を拭いているような真似をしながら他人を装う黒猫をむんずと掴み、道連れにした。どうせ飯だ、お前も来なきゃいけないんだからな。

勿論ご飯は美味しかったです。ママンは偉大である、時に神様よりも偉大だ。俺にはそれが良くわかる。

第3話

13歳になりました、皆さんおはようございます。赤い変態のシツキです、紳士タイプとして三倍になります、何かが。

一気に倍以上飛んだのはヒミツ、大人な事情。別段変わった事は…
…無きにしも非ず、かな？俺やアナトは全く変わってない、が。

「にいさま」

「おうおうどうした愛しのマイエンジェル」

女の子が俺に抱きついてくる。黒髪をツインテールに結び、花の髪飾り　アナトがプレゼントした　をつけ、純白のワンピースから覗く細く白い足が非常に眩しい。表情も、太陽のように眩しくて俺が溶けてしまいそうだ。

今八歳。俺より五歳年下だ。魔法に關しても才能もあるみたいだ、流石俺の妹　さいいんのり　西院祈里。お兄ちゃんでも良かったのだが、ずっとにいさまで固定だ。

「にいさま、遊ぼうよ」

「よしよし遊ぼう、なにして遊ぶ？」

「よめしゅつとめじゅっ」！

「よーし祈里、ちょっと待ってなさい」

「？」

俺は部屋から出てとある人物のもとに向かう。リビングのソファに堂々と鎮座する黒猫の尻尾を躊躇いなく掴む。

『なああああ！？な、なにをするんだ司月！』

『それはこっちのセリフだクソ猫があ！俺の愛する妹に変な事教えたのはお前だなあ！？』

『っ……そんなわけがなからう！私ではない』

『うちの両親が嫁姑ごっこなんていうどす黒いごっこ遊びを教えるわけねえだろっが！』

『ぐ……！仕方なからう！面白いテレビがあれしかなかったのだ！』

『教育的指導お！』

『いやあああああ！？』

我が妹に変な事を教えたアナトへの肅正だ、当然のことである。

一頻り戯れた所で、祈里は疲れて寝てしまった。可愛らしい寝息を立て天使のような表情で目を閉じている祈里。今は髪飾りを外して、髪は自然な形だ、変な形がつくといけないからな。頭を撫でてやると、艶やかな黒い髪は触り心地が良い、これは癖になる。

『祈里は寝たのか』

『ああ、寝たよ』

アナトが魔法か何かで扉を開けて入ってきた。そして俺と同じように祈里の頭を撫でる。

『うむ、これは良いな、癖になる』

『爪たてるなよ、大事な妹に傷が付いたら俺はなにをしでかすかわからんからな』

『……一応、私は神なのだが』

『神と祈里、どっちが大事か。俺に聞くか？』

『……善処しよう』

理解してくれて何よりである。

『……魔法学院、だったか』

『明日からな』

『しかし最早習うものはなにもないと思うが』

『まあな……でも一応通わないと体裁的にな』

魔法学院　俺が明日から通う場所だ。13歳から通うのだが、魔法学院から本格的に魔法を学習する。小学校までは常識は基礎的な知識だ。確かに魔法に関しちや習得済みなんだけど……近所の人から『なにあれ、学校は？』『あれかしら、最近聞く……二ート？』とかひそひそと話されたりしたら精神が保たない。というか、うちの両親なら必ず俺を魔法学院に入れるだろうし。

ま、試験はギリギリに、日々は安穩に。これをモットーにやっていきたい。だって目立つと面倒事しか来ないし、それに有名になつちやうと人混みに紛れて女性のパンてげふんげふん。女性を狙う不埒な輩を見つげるためには有名だと厄介だからな、うん。

決して幼い頃合法的に見れた下着姿（銭湯やら甘えやら危険な服装の綺麗なお姉さんやらやら）が見れなくなったから、とかじゃないんだからな！

『……む、魔力が増えたぞ』

『そりゃあな、果てしない……俺の歩む霸道に並ぶ数々の聖なる物達の行く末を、俺は紳士として見届けなければならぬ使命があるからな』

『……そうか』

なんか関わるの面倒だ、と言わんばかりに興味なさげに丸まって寝る態勢に入るアナト。

『因みにアナト』

『なんだ』

『俺はしましまが好きだ』

『……………』

無視されました。ああん、酷い。せつかくの俺の大胆告白を無碍にあしらうとはな……こう、心にくるものがあるな。まあ、ゴスロリ美少女が『私の下着には興味ないのか……フン、もう知らん』みたいな思考をしながらも……水玉か』とか考えちゃうんならこの無視も悪くない、いや、良い！実に良い！

「……にいさま？どうかしたの？」

興奮していると、いつの間にもやら起きた祈里がこちらを見ていた。まだ眠気眼で、しきりに目を擦っていた。

「いや、なんでもないよ。それより祈里、あんまり目を擦っちゃダメだぞ。ばい菌さんが来ちゃうから」

「んー……ばい菌さん、やっ」

「そうだろう？なら起きたなら擦らずに、洗うんだよ、わかったね？」

「はい、ごいさま」

敬礼！とばかりに右手を額に掲げる。どこで覚えたのかは知らないが、可愛い。これは素晴らしいぞ、俺の妹萌えが更に加速した。

「ねえにいさま」

「どうした？」

「これけーれーっていうの！知ってた？」

「敬礼って言うんだ、知らなかったよ。祈里は物知りだね」

「えへへえ」

頭を撫でてやるとふにやっとな無邪気な笑顔を向けてきた。ああもう、どうしてうちの妹はこうも天使なの？誰なのこの子を天使にしたのは。もし心当たりがあるなら俺の所まで来なさい、翌日まで妹談義で語り明かそうじゃないか。

「でね、このけーれーって、かいの人がじょういの人にけいいを表すんだって」

變で回してやるからな……フコウ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1663y/>

最強の脇役の人生

2011年11月8日02時12分発行